の方は、今は別室の奥の方に展示されていて、その部屋を回らなければ見逃すところでした。ByrneはHunterの頭像の下の標本室のど真ん中に、最も目立つように陳列されています（図４）。隣には上腕骨か

図４　Hunterian Museumの主要な内部、インターネットより引用。中央にHunterの胸像があり、その下にCharles Byrneの全身骨格標本が飾られている。

ら肩甲骨を経て脊椎にかけて異常な骨が小さな翼のように生えている不思議な骨格が並べて陳列されています（図５）。こちらの標本は大変ひどい二分脊椎なのでしょうか？あまり注意深く見なかったので、どのような経緯でここにおかれているのかは分かりません。それにしても、どのような体表の姿であったのだろうと想像させられますね。

図５　極端な二分脊椎？の骨格標本、Hunterian Museumのパンフレットから引用。この骨格標本の隣にCharles Byrneの全身骨格標本の一部が見えている。

他にもHunter以前の時代に作られたという、板に貼付けてあるヒトの全身の動脈標本、静脈標本（Evelyn Tables）などというものや、多くの外科標本、比較解剖学のための哺乳類や鳥類の骨格標本、正常および奇形の胎児などなど、数えきれないような標本の数々です。双頭少年の方は多くの双胎奇形の中にあったはずなのですが、あまり目立たなかったのか、ほとんど印象に残っておりません。

Hunterはこれらの標本をかなり強引に集めたようです。半ば怪しげな行為もあったようで、これは当時の基準に照らしても犯罪であろうとされています。

Hunterの遺体は質素に貧民の葬儀とあまり変わりなく葬られたようですが、1859年にFrank Bucklandによって発見され、先日Royal Weddingが行われたWestminster寺院に埋葬し直されています。せっかく今回、この寺院にも行ったものの、歴代の王と女王、NewtonやDarwinさらにLawrenceの墓などに目を奪われて、Hunterの墓は見つけることができませんでした。

博物館を出ると、一階の大学の入り口あたりでは映画の撮影が行われていました。ややアンティークな服装をした俳優達が演技をしていましたが、果たして何の映画だったのでしょう。外に出ると、いかにも私らしいのですが、土砂降りの雨に変わっていました。そのまま学会の午後のセッションに行きましたら、講演会場が直接屋根に接しているためでしょうが、講演が聞き取れないくらいの土砂降りで、演者がときどき中断するほどでした。翌日に天気の話を聞くと、ひょうが降ったということでした。ただ、今回は一昨年のCopenhagenと違って、幸いなことに天気が悪かったのはこの１日だけで、ほっとしました。

それにしてもLondonという街は、歴史にマッチした街並みと、たくさんの広大な公園に縦横に走る地下鉄と合わせ、物価さえ安ければきっと住みやすい所なのであろうと想像させられました。一方で歴史深い街であり、旅行者としてはここでいろいろとあった歴史を考えることがふさわしいと思われました。

お知らせ

事務局の年末年始休みについて

北海道医師会ならびに北海道医師国民健康保険組合の事務局は、
平成23年12月29日（木）から平成24年１月３日（火）までの期間、休業いたします。